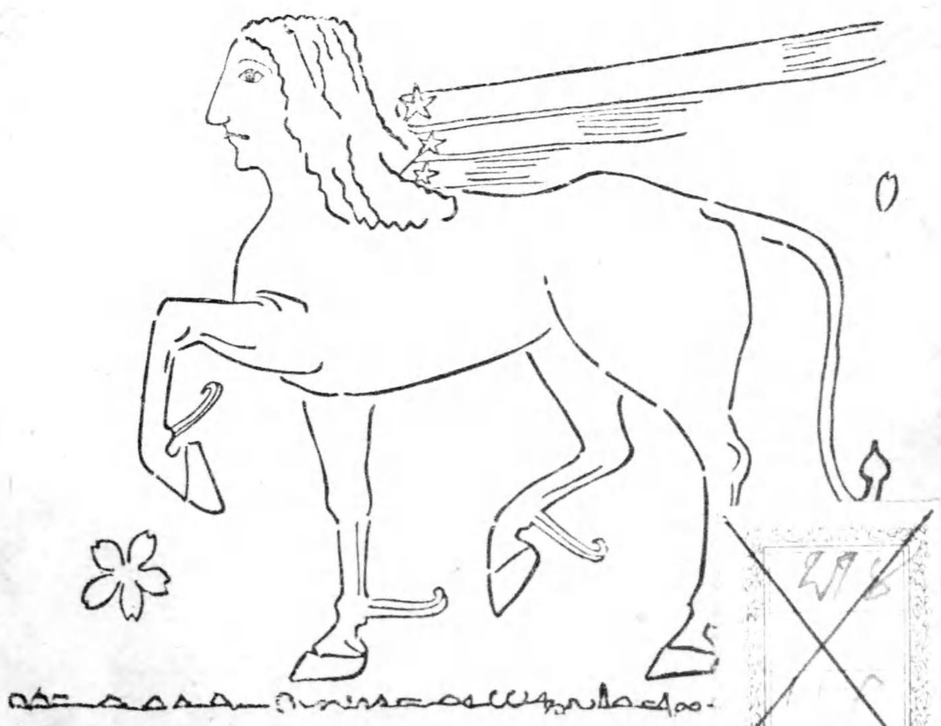
NÉO SPHINX'S SERIES NO 4

小說

川月花



東京 馬上大學社 發兌

私の謎

朝二本、晝三本、夜四本の脚で歩む動物は何だ

大正二年一月二十一日午後一時出

その壁は初め二本のときに大きくて高くつて、終りに夜四本のときに低く、小さくなるものだ。

大正二年二月二十日午後一時出

ネオ、スピンクス

大正
4. 1. 28
内交

特100
298

無星神叢書第四編

小説

川月花

神星無
(NÉO SPHINX)
米本悅三郎作

五六
8.1
文

ちよつと一言

私は決して二人の女をモデルにしたのではない。只自分の心の悲しいことを消す爲に書いたのを印刷にしたばかり。私は小説までなるべく正直に書きたく。又モデルがないなぞといふ虚言は云はない。

神聖な靈の戀愛は悲哀である。けれど不神聖な肉の戀愛も愉快なものでもなからう。靈の戀愛を經驗した私の悲哀は到底戀はうれしいものだといふ告白をする事が出來ない。「靈より肉に」それはきつとそこに行くべき道ではない。戀愛といふ器は神聖に、大切に取扱い遠方から眺め憧憬すべきものである。

私は過ぎ去つた夢のような若い秋子や花子君が戀しい。けれど今その時の有つたことを考へてみれば何の悲哀も舊懷も起らない……小説は虚僞である。無いこともあるように書いた罪！それは二人の戀人から受ける。それは私が花子君と二人で汽車に乘つたことなぞは夢にもない。それと今は自分に一人の戀人もないといふことを斷はつて置く。それは戀人と思つてゐた秋子又は花子君それ自身が作つた罪なのである。

自分は戀人だと思つてゐる時。何時の間にかその夢を破られた。それは自分にとつては不幸か。幸かわからない。けれども今は自分の心が一人の女友も戀人も何もないといふこと許りが誇りたい。それは今非常に二人の戀人が戀して來ても私の一人生活の確な意志には何の變更も與へないのです。

私は多くの男に謀(だま)されるような意志の不確な女は私の靈の生活を養ふ戀人としては不適當

花月川

一

雨が音のしないやうに降つたり、音のするやうに降つたりして居た昨今の天氣には、今日の快晴がちがつた世界に住まつてるやうな氣持になつてきた。園庭の新綠は雨に埃を洗はれて、朝日に輝りつけられてるのは、萌えたつやうな新らしみと美しさがみなぎつてゐるのを見て、ポカーンと自分の居るのも忘れて居た純吉は、雀の、チユツーチイ、チイチユツといふのにドキリッと氣がついて、下の座敷で十か九つ位の男子の聲のやうな秋子の聲を聞くともなしに聽い

と答へなければならぬ。

私が后の花月川と水色の戀を筆にするときは二人の戀人の肉の生活をその經驗のない私が書かなければならないのでしよう。私はその筆を執るときは全くの戀人から離れた他人の見地から貴嬢方を書くことなのでしよう。この文筆は自分が戀人の地位に立つて消にて行く戀の悲しさを堪へる爲に書いた。けれどその時、私は戀の溫さの中に包まれてゐたのでした。けどその溫かさは眞實の溫みではないのでしたらう。

私がこの小説を作るときは自分の心を自分で書いたといふ告白をすることができます。けれど二度筆を執つて「后の花月川と水色の戀」を書く時は他人の心を以て他人を書くといふジヤーナリスチックになる鐵面皮を今から許していたゞきたい。それは二人には事實のことを事實と書かれるのであるから何の惱む處もないことと思ひます。事實は表現すべきものです。

今この小説には奇な企ての序みたようなものを書くとき私の心はイライラしてゐました。それで、こんなことを書いた……けれど間もなくそういふ心の消ねる時があることなのでしよう。

大正三年七月三十日午后六時

蟬の聲の噪しい書室で　　ネオ、スピンクス

てゐた。純吉は其聲のいかにも水々して若々しいのをうれしく思つてたが、その秋子の聲のうれしいだけ、豆田の叔母から來た手紙が心配になつて來た。その手紙の紙は秋子を包んで、あの遠い遠い豆田といふ處へ送つて行くのではないかと――そんなことばかり考へて居た。

秋子は純吉の家に逃げて來て、最う一ヶ月になつた。秋子は純吉には早く慣れた。前に勿來關で會つたことがある故かも知れないが、また、二人は言ひ知れぬ先の世の約束てもあるかのやうに神秘に性の差を度外して、恰ど林檎を食べないアダム、イブのやうに親しくなつた。

* * * * * *

秋子は一人の兄があつた、其兄を引取つて生活をしてると繼母が世間體の口上だけ。實は其の兄を少さい時分から給使や何かにして、其金を卷き上げて居、そして兄も徵兵の年頃になつて廿圓位の金は這入るのも着服して居た。繼母とは自稱だけで。少さい十二の時に引取つた其兄さへも母とは呼ばなかつた、其惡い繼母といふのは、兄の親の祖父に當る人が其の女を下女に使かつてゝ、一人の兒を死產させた。其祖父は一人ものゝ老人で、死際に其女を嫌やがつてたが、無理に自分て死水取つたとか。それて兄と秋子二人は其の前か

ら兩親に死に別れたので孤兒と爲り、遂に兄と妹とは別に引き取られた。姪も一時其自稱繼母お久米の處へたよつて來た。そのやうに人を呼びよせて欺す甘い口を持て居たお久米は職業としては女許りの雇人口入を業としてた。秋子も勿來關の叔父の處に引取られて居たものゝ。純吉が勿來關へ行つた時。東京へ來ない？に憧憬して、其叔父に東京へ行き度いと毎日のやうにセビリ付いたので、まア行けッと。態のいゝ斷はられ方をされて、其叔父の親類の婆さんに連れられて兄の處へ舞ひ込んで來たのだ。

するとお久米と云ふ女は醜貌此上ない奴て、其れて欲の皮の撐ッてる人間だつだ。秋子が來ると晝の間は他人の洗濯をさして其金は卷

き上げ、夜は自分の出してる勸業場の見せ番をさして十二時頃まで其處に置く、それでやたらと叱る打つ、碌な食事もさせない、お久米婆さんは何とかして女を金に代へる事ばかり考へてた。

久米婆さんの友達の磯公と云ふ車力が、秋子の裏庭で働いてるを、き、座敷の方て、ゴチャゴチャ話聲がしてゐたが——

「あの玉を一年だけ、なあ！少し今までの女のやうに使はねエで、面どう見てやりねエ、エッ、すりやア、女も少とはまとまつた錢位にあア賣飛ばせらアな、　…今！御前も欲の皮の撐ッた婆だなあ、今ぢや、四十兩にかなりあしねえやな。まあ少し待ちねえよ、」お久米はこれに反對して、「なかなか云ふ事をきかない女だ、ぐづぐづ

してると逃がしてしまう、今は如何だね？」磯公は、「さうさね、まあ考へ見よう」といつてた。車力の磯公とお久米の毒舌を聞くともなしに聽いた秋子は、自分も間もなく賣られるのか、……と思ふと左程物に動じない大膽の少女心にも、身が浮くやうに感じた。それで、或る日醜い顔のお久米が、あの何さんは何圓で何處々々の、思ひものになつてる。それで親子は安樂をしてゐるといふやうな事を毎日云つて、遂には直接に、命令的に、其奉公の有利なのを勸告した、そして、はてはサンザンにナグリつけられた。

エ、お前のやうなャクザ女は出て行けッと家の外に醜い丈の短い身長から出た、畸形な黒い、クソ力のあるお久米の手で押し出された時、

秋子はもう如何しやうかと思つた、……そのとき思ひついたのが、あの前に手紙を出して置いた、姪の奉公して居る、純吉の家を目當すことであつた。——あそこに行けあの家こそ、姪が引取られてゐてお久米の甘言から深い深い淵へ沈んで行く處を助けられた、あの家……それに其家の主人の純吉には、まんざら一面識のないのでもなかつた。前に姪を勿來關の秋子の引取られてた叔父の處へ一時隱して置いて、お久米の手先の惡漢を煙にして、何處へ行つたかと迷はせたとき。お久米もさるもの、それとなく臭ぎつけたので。勿來關へ追つて行くといふ事なのだ。其を探知した純吉は、勿來關へ先越に行つた、——其時一寸陰れに來た姪と一緒に居た秋子は十四歳てあつ

た、可愛いゝ色の雪のやうに白い、細い身體の、少さい顔で、赤い裏(なつ)實(め)のやうな唇を動かして、電車は知ッてるのといつた純吉に、私ね七ッの時にこつちへ來たんです、その時には電車は線路だけが引いてありましたよ、と尻上りに云つた、純吉の東京へ行きたい？――に元は東京で產れたゞけに秋子はもう憧憬てしまつたのが東京の空氣であつた。それで純吉が勿來關へ行ッた年から一年經ッて突然、夢のやうに、純吉の家に居る姪の處へ、逃げて來た月の前月頃、手紙が屆いて、「私も東京へ來て毎日、晝間(ひるま)はお久米に追ひ使はれ、夜は十二時までお久米の出してる勸業場の見世に出てますから、夫となく勸業場へ姪に會ひに來てくれ」と、カナ釘文字の葉書が舞ひ込んだ。――姪

が純吉に、又私の二の舞が彼の女(そんな)の處へ來ましたと云つた時、……純吉もそれとなく、あの秋子と云(い)ふ女の貌が深く頭に印象されて居た際なので、燃えるやうなうら新しい力が湧いて來たやうに思へた。其時、秋子が突然に逃げて來たので、純吉は何だかロ―マンスのやうな匂と思つた。

*　*　*　*　*

秋子が逃げて來た時は着のみ着のまゝで來たのだ、それで毎日自分がお久米の處へ置いて來た着物に氣を配つてた、如何(う)にかして取り返したい、あの着物は、頭を何度も下げて叔父に買つてもらつたのですからと。純吉は女は衣類が生命であるといふ事を知つて居た、それ

て男を四五人使つて、やうやくお久米のシッカリと握つてゐた秋子の着類を取り返したが、叔父から持たせてよこしたと云ふ金は、お久米は如何しても返さなかつた、あれは食料代と云つたさうだ。

秋子は今は自由に天地に跳べるやうになつたが、そこに制限が一ッあつた。それはお久米の家の近へ行かないことゝきめて、買ひ物に行くにも、なるたけお久米の家の方へは行かないやうにしたが、ある日ピタリと御久米の醜顔と向き逢つた、お久米は恨の限と秋子を人事不省になるまでに毆打のめした、往來の人が仲裁して、ャッとの事で、――秋子は半裸體になつて亂髪で純吉の家に歸つて來たが、お久米が向ふ見ずに賑やかな大通でしたことなので、通信は之れを

廣けてしまつた。

秋子が今何處に居ると云ふことが新聞て分つた。豆田に居る秋子の死んだ女親の妹は、心配して、他人の處へ親族のものが二人も居てはと、秋子にだけも來るやうにと手紙で旅費を送つて來た。

二

秋子は更に新らしい香を嗅ぎ初めた、其豆田の家に可成の財産があるとかなので、ひよつとしたら自分は其家でお嬢さん株でやつてゐられるのではないかと云ふ欲望に驅られた、夫て未だ少女心の秋子は、うるさく純吉に頼んだ、純吉も自分の處へ秋子を引き止めて置く

權利のないのは分つて居るが、何んだか自分の力の一部が切り取られるやうに感じたが、先づと、秋子の荷物一切を豆田の家へ身體より先へ送らせた。純吉はやるせないやうに、言ひ知れぬ悲しさが湧いてきた。純吉はもう秋子は豆田の家へ行くにきまつて了つたと思ふと。もう指で數へる程しかない日數の中に、二人の生命が　入つてるやうな氣がした。そして、その日數の經ち限つた時には、二人の生命が消えるのではないかと想つたり何かした。純吉は四五ヶ月秋子を自分の家に置いて見ると、どうしてもハッキリとした性格のない女であつた。で、何か少さい胸に心配事でもあるときの顔は、不如歸の口繪の浪子の顔そつくりなのに、なんだか可愛想な氣がした、秋子

の親二人は肺病で死んだといふ、もしやしまひには浪子のやうな病氣でも出るのではないかと思ふと、もう、居てもたつても居られないやうに、秋ッ秋！と呼んで、その顔を見るのだつた。それで、いつでもかういふ事をいつた。御前は何んでも仕たい事をして身體を強健にしなくつてはいけないよ、御母さんや、御父さんの病氣が出ると大變だと云ふと、秋子は私もさう長くは生きてられませんよといふ聲が、おキャンのうちに、しめつぽく聽き取つた純吉は、本を敎へてやつたり何かしてなるべく自分の側に置いといた。

純吉も甘つたるいやうな十六歳の秋子の心に接して見ると、何時とはなしに自分が二十六歳で居ながら、十歳も若くなるやうに感じた、

それで純吉は秋子と同齢のやうな氣持になつて、秋！御前、己は大嫌ひだらう、いゝえ—そんな……純吉の側へ來て、椅子の下に坐つて、上眼で純吉をヂッと見上げたり。何かした、さういふときに純吉は、この眼も、もう間もなく、この部屋から消えて了ふのかと思ふと、どうしても秋子の行つて了ふと云ふ運命が勝つても、引止めて置くといふ幻のやうな力のハリアイなさに縋りついて、どうにかして自分の側へ止めて置きたいと……純吉の顔は淋しくなつた。秋子は何を思ひついたか二階の下にトン、トントン、トンと降りて行つた。

——純吉は見果てぬ夢の消えてゞも行くのを追ひかけるかのやうに、直に秋！と呼ぶのだつた、すると秋子はトン、トン、トンと二階を

登つて來て、御轉婆な容子をして私を御呼びになつてと聽くのだつた。純吉はウムと云つて無意識に又秋子の顔を見詰めて居た。秋子が顔に何か付いてるのかと撫てる容子が何處となく、眞の少女らしい可愛氣のあるのに、純吉は堪らなく、うれしさや、悲しさや、淋しさや、悦ばしさが一緒に湧いてきて、如何しても離れたくないといふ氣持が胸にこみあげてくると抱き殺したいやうな氣分がして來る。秋子は梯子段の上り口の扉から下座敷の方の物音に氣を配つて、チョコ、チョコと笑顔して机の側へ來た。御用は何に？　と机の上に數冊の本が置いてあるのを見て綺麗な書！　是は何の御本です？と水色クロースの表紙の本を手に取つて純吉の方へ出した。

其はね戀つてものが書いてある書だよ。
秋子は、はあ――と知らばくれたやうな尻上りの聲をして、
私、開けてよござんすか。
純吉はあゝと笑つた。
秋子は奇妙だといふやうな眼で、書の中を見て居だが指を小さい横文字の上にやつて。何んて書いてあるのでせう？　純吉はどれと秋子の手の方に首をのばして見。笑顔で秋子の眼を見て、お前はキイタやうな字を見付るね、それは、戀の悟りつてものだよ。
讀んで見ようと純吉は小言で……
Dove è grand' amore, quivi è gran dolore……

秋子はそれをきいてゐたが、
變な風に讀むものですね、戀ッて？と秋子は訊く。純吉は秋子の指を持ッて、「なんだそんなに知らばッくれて。
秋子は、クスクス笑ッて、貴方がですか？
純吉は秋子の指を力を入れて引いて、「そりや誰から云ふのだい」と
秋子の顔を見ると秋子はキッキイと笑ッて、その本を片手で持ッて、
表紙を開閉してる。
そして純吉の方へ、持たれた指を押し出してゐた。
純吉は其の持つてる手の眞白な肥ッた指の皮膚と。其の皮一重下に
透いて見える淡桃色の肉の色とは、その手の微かに動くに連れて心

も弄はされた。この放り出したやうな性格を持ッた女の心を思ふと
うれしくなつた、それでうれしくなッただけ淋しさが伴ッた。
秋子は椅子の側に立つて思ひ出したやうに御用は何——何？
純吉は用は無いのだよ、と指の爪の處を見てると、秋子は首を純吉
の方へちよッと曲げて、私、下のお座敷へ行きますよ、皆んなに何
か謂はれますから。
なに今頃そんなと云つてなんだい、散々話したあげくに。秋子は笑
顔して、横眼で、純吉の横顔を見てゐた。

ねー秋！お前田舎と東京とどつちが良いか？秋子はもう下座敷の批
評などは如何でも可いと云ふ風な容子をして、小さい口唇を純吉の
額の處て開いてそりや東京てすよ、てもね！私田舎もいゝんてすよ、
私田舎の方が面白いと思ひますよ、知つてる人が澤山あるんてすも
の、東京には知り人がないんてすもの、東京は嫌や、——
純吉はそれならなぜ東京に逃げて來た？
私逃げて來たんじやないんてすよ、只だ來たのてすよ
そりや來たには差異いないが……
そんな事いゝんてすよ、あなた　何時連れ行つて下さるの、私を……
お前そんなに行きたいかい、田舎はつまらないよ、そりや一時は可

いかも知れないが。間もなく、嫌になるよ、東京にました處はないよ。知り人がないなんて云ふけど。是れからだんだんと出來るのだね、それにお前は元東京の産だ。

それでも私嫌ですよ。何んだか東京は面白くないほんとにせかせかしてる處ですね。

でもお前は來たい〳〵と云つてたんじやないか。東京へ來たいのて首を長く延してたのじやないか。お前はよつぽど歴つぽいね。

否えさうじやないんですよ。私の思て居た東京は今見てるのとは差異ふのでしたよ。思ひがけない東京なのでした、それて私嫌になつたのですよ。貴方何時私を連れて行つてくださるの、豆田の家でも

待つて居ましやうし。荷物ばかり先に送つて、肝心の本人が中々行かないなんて變なものですね、貴方、何時連れて行ッて下さるの、秋子は斯様な風に純吉に迫つたが。……

*　　*　　*

秋子が勿來關に居つた時、其叔父は秋子を可愛がりは爲なかつた。兩親が無かつたので血族上の義務と云ふ觀念から打算して、引取つて世話をしたものゝ、我儘に增長して居る秋子を、面白くないものに考へて居た。秋子は酒癖の惡い叔父は恐しがつて居たが。叔父の妻と云ふ人は善い性質の人てあるので、秋子は其のいふとを聽かなかつた。

秋子は誰れ謂ふとなく親類中での我儘物であると云ふのは姪から聽いたが。實際今は毎日眼の前にチラついて見せつけられた。純吉は姪の話て、何んても七八才位の時、源氏節の弟子に呉れてやらうと思つたら向ふて、餘り利發なのを恐はがつて斷つたとも、實際だらうと感付かれた。

＊　＊　＊

ね秋、最う少し待つてくれ、己の方にも都合もあるから——お前の云ふのも無理じやないが……己の方もねえ秋！

でもね貴方の仰有るやうに先え先えと延して行くのは私嫌ですよ、私を行らないおつもりなのでしよう、なんだか私にはさう思へるんですよ、

否え左様しやないと純吉は云つたが、實際は延して行くつもりてはなくつて、ずつと、ずつと、延しきりに延して、行かないやうに爲たいのてあつたが——何にさ汽車の行く路に紅葉のある時の方が奇麗で可かないかと思つて……行かないッて理由じやないよ。先に荷物が送つてある位じやないか、——さうだらう、と秋子の手首を以つて引き寄せた。

秋子は首を捻るやうにして、え、其れはさうですよ。けれども、ね、貴方の御約束は當にならないやうな氣もするんですよ、なんだか遠い路だッていふのですもの。

純吉はほんとに可愛らしいといふやうな眼つきて椅子の側に立つてる秋子の顔を見あげて――お前を彼地へ連れて行くのは、ほんとうは嫌なんだよ、と、秋子の柔かい肥つた手の指を弄づらしてた。

さうなんでしやう、――それはねえ。一生貴方の處に居られるのなら……さうじやないんでしやう、だから私嫌ですよ、私ね、彼地へ行つても、又嫌になれば、書けないんですけど手紙を出しますよ、その時はね誰にも見せないで貴方一人で見て。ねッ。下さいね、私ね。義理にも二年許りはあッちへ行かないと。又あとて世話になるとも出來にくいのですもの、けれども、ね、二年歴たない内にでも。私が手紙を出したら呼びに以來しつて下さいな、ね、御願ひですか

ら――

純吉は默して居た、女の眞心は解らないと思ひながら、何處やら可愛らしい、なつかしい處があると思つた。

*　　*　　*

秋子は豆田の祖母の處から手紙の來る前には、純吉に斯様云ふ事を云ッてた――私のやうな我儘ものは、貴方の御側に居るといけませんから、他の家に奉公させて下さいませんか。秋子は自己の我儘の自覺か、又は他人の家を非常の幸福でもあるやうに思ッてゐたのかも知れぬ。新しいのを望む乙女心の好奇であッたかも知らぬ。純吉はその時、それに反對して、知らない人の處へ奉公するならお前は

豆田に死んだ御母さんの妹があるッて言ふじやないか。その家へ行ッた方が良かない？と云ッた事がある。

＊　＊　＊

それが豫言で今は如何しても行くときまッた秋子――純吉は自分の家に居る秋子を思ひ出したやうに呼ぶのだッけ。

こないだお前が魂消えさうな聲出したのは、ありやいッたい如何したのだ？

ほんとに道さんと云ふ人は嫌な人てすよ。私が洗濯してゐたらイキナリ後から來て抱いたのてすよ、それてあんな聲出しましたの。

純吉は嫌な氣持がした。奉公人がそんなことする奴があるものかと

思ッたが、荒だッて叱るもの男らしくないと思ッた。

それだけ？

え、嫌な人！

いゝよ秋、はいと尻上りに云ッた

秋お前と勿來關て夜道を二人て並んて歩いた時ね、お前彼の時どんな心持がした？

秋子はどんな心持つて……

お前には解らないだらうね

あの時ね、お前は今よりもつと可愛かつたよ、そして可愛いゝ細い透き通るやうな聲て、今よりももつと色が白かつたね、椅子の側に

倚つて立つて居る秋子の顔色が今も染井吉野櫻のやうな色をしてるのを見てそつと胴に手を懸けて、自分の椅子の方へ輕く引寄せた。

秋子は爲るまゝにしてフックりとした頰は、純吉の頭の髪の上に微かな溫みを感じるやうに、くッついていた。甘つたれたやうな唇が動くにつれて引締つてる口元が如何にも可愛ゆく見えた。

あのときは私眞實に東京に來たくて、來たくて仕方が無かつたのですよ、毎日、毎日、用をするのは嫌でしたよ、それに貴方が、東京に來ないか、なんてな仰有つて下すつたものですから、堪らなくなつて拔け出て來やうかと思つた位でしたよ。それですから、よく御叔父さんと爭らッて毆打られた事もあるんでよ。

さうあの時お前は、私、東京を電車の線路を引いてる時に、勿來關へ來たものですから、良く覺えてないつて云つたね……秋子は大人ぶつた聲をして、ねえあなた……

純吉は、何にさ、と秋子の手の甲をさすつて——己がお前を東京に來るやうにしたといふのか、？

秋子は笑つて。純吉の肩に片手を掛けて切りと肩の邊を徒して居た。

純吉は首を捻つて后を向いて弄らしてる秋子の手を見ながら、ねえ秋！慈じ豆田の祖母さんから手紙なんぞ來なければ良かつたね、さうすると何時までも家に居られるんだけど、

否えだめてすよ、姪も居ますし、私も遂、我儘になりますから、自

身の爲めにならないのですよ。

秋！　はいと無理に尻上りに力を入れて返事をした。

いよ〳〵行くかね、己はお前を連れて豆田まで行くのは堪らないやうに淋しい氣がする。

ねえ秋、お前はさう思はない？

ですけどねえ。一度は行つて居ませんと、又今度私のやうな孤兒は都合の惡い事もあるのですから、それに姪と一所に居るのは嫌やですよ。それにあの道つさんと云ふ人は變な事ばかり云ふんですもの、何云つたら皆な己の處へ謂へば叱つてやる。

此間も私が貴方のお部屋へ這入つたら、室戸の外で立聽きしてましたよ、さうか、仕方がない奴だ。なるたけ寄らないやうにおしよと

いつた。秋子は純吉の傍に座つて雜誌の口繪を見て居た。

純吉は秋子の爲に心を痛めた。彼女の幸福は豆田の家に行つた方が可いと思つて居た。其の家の妻は秋子の死んだ母の妹であるから、其れに男子の一言、行路七百哩餘の遠方へ、少女の一人旅は——家に居たり可愛くて仕方のない女を、如何して一人手離すことができやうか、それに知らぬ土地へ一人でやるのは危險だと思つた。己が一緒に伴れて行くと云ひ切つた以上は、武士の性質に生長した純吉を決斷させた。行かなければならぬ、これが意地であると思つた。

秋！己はお前が大好きだよと毎日のやうにいふ純吉は、秋子から逃れることは出來兼ねたのだ、けれども、如何云ふ案配て、秋子が自分を捕へて了つたのかは解からなかつた。或る日秋子に、姪が徒戯に丸髷を結つて見た。秋子が姪に押され押され、すまして純吉の書齋に這入て來た時。純吉は餘りに變つた容子に驚かされた。眞實に丸髷は女を美しく見せるものだと思つた。

秋子は顔を桃のやうに赤くして、熱つた耳際から頰が如何にも水々して愛らしく見える。少さい聲て、可笑しいてせう、と、純吉の側へ來てピタリと座つて了つた。純吉は堪らなく可愛くなつて。

ほんとに良く似合ふよ、是から毎日、其の髷にすると可い、

いやてすよ皆んなが何にか云ひますよ。秋子は純吉の膝に手を掛けて居たが、寄り懸つて居睡つて了つた、丸髷に結つてる秋子の頭が、鼻の下て油の臭をフワリフワリと薫らせるのが純吉は羞かしくなつた。梯子段にミシリミシリつて音がする、大方道助が又立聽に來たのだらうと純吉は思つてぢつとして居た。間も無く降りて行つたやうだ。純吉は秋子の背に手をのせて睡顔を見てゐた。

純吉は秋子にもう日數のなくなつた少の間にても本を敎へやうと思つた、秋子は毎日書齋に這入つて敎はつた。難解い書が好きてあるのが純吉にはうれしかつた。或る日本を敎はつた後て秋お前睡いのか——、純吉の問も聞き流し机上に俯伏して秋子は居睡つて居たが、

やがて倒れて了つて、メリンスの眞紅な下着が、はだかつて、眞白な肥つた脛を現はして、無邪氣な顔して腕を頭髪の先に延して熟睡して居るのに氣付いた。純吉は無中になつてた書から、眼を秋子に移した、胸はドキドキして高い動悸はピクピクした、如何したら可いだらうと思つた、が……起さうと決斷して。秋、秋ッと云ふと眼を開いた、私斯んなになつて睡つて居たのですねとキョトンとして眼をこすつた。純吉は其愛苦しい頬に、少し生えた顋鬚をコスリ付けた、秋子は痛いんですよと笑ひ顔して、其のされた態を除けやうとも爲なかつた。純吉は秋子の手首を握りしめた——

秋子は時に鏡の前てイ、イ、イをしたり、蟹のやうな變な顔して寫して

見て居ることもあつた。純吉はそれを蔭の方て見て未だ少女だと思つた。そして感情が理性に敗北したのを賞誇した。もう何日に行くと定まつた時は、秋子もうれしいやうな淋しいやうな悲しいやうな心になつて、純吉に、貴方！私を一生お側へ置いて下すつつて？それなら、私は、なんて豆田へなんぞ行くもんてすか——外に美い方が澤山あるのてせうね、こんなお多福と捨鉢に云つた。何にお前がお多福だつて、と純吉は堪らくなつたそんな事を云ふと斯うだよ、いゝかと力を限りに抱きしめて、外に若い方なんてお前が一番よく知ッてるじやないかと桃のやうになつた秋子の顔を見ると、二つの眼がぢつと寄り座つて純吉の上から見る眼を下から見上げた。動かな

い四つの眼は電氣でもあるかのやうにプルプル〟と寄り附いた、そして唇と唇とが寄つたとき何とも云へない新しい味を二人は匂いだ。純吉は其の捨鉢に云つた言葉を思ひ出しては、秋子を呼んで抱いて強い接吻をしながら、貴方、私が好きなのと云ふ口を、唇で塞いで。己はお前をいつまでも忘れやしないよ……といつた。

三

新橋から矢のやうに走つた東海道の最大急行列車が二人を乗せて、關門に着き、汽船へ乗つて、門司へ上る時などは、純吉は秋子に荷物一つ持たせなかつた。汽船から門司へ登るとき、秋子の後を二三人の荒男が追ッて來たが純吉の一緒なのに驚いて、又海岸の方へ行つて

了つた。鹿兒島行の汽車に二人が乗り込むと、寒暖の度が十一月にはと驚かされるやうに溫かであつた。二人は生き返つたやうな氣分がしてラムネやサイダーを飲んでた。——間もなく久留米に着いて。二臺の人力車が暗の裡を走りに走つて豆田の家に着した時は、夜半の二時頃である。車夫の大きな聲で、其家中が珍客の來たのに驚かされた。別建の一室が、純吉の睡眠する部屋になつた。純吉は其夜は泊つた、秋子もその次の間に睡るように床が延べてあつたが純吉の部屋に這入つて來て、寂寥しいような可懷氣に純吉と會話した、純吉が此處には書生が何人居るの？

八人位居るのでしよう、何んだかゴタゴタしてますよ。

さうか、お前は己の家に居るより可いだらう、秋子は下を向いて居た。純吉は微かな少さい聲でお前の行く末――生意氣だけど――いゝかえ、――思ふと――お母さんの妹が此の家の奥さんであつて見れば、お久米の處に居るやうな事はない。秋、己は夜が明けると御暇するから云つて置くよ。今の書生の處へなんぞ己にしたやうに馴馴しくすると大變な間違が起るよ、其れを良く氣を付けるんですよ。……何しても遠い路だから又逢へるかなんだか解からないが、秋さん、己は是處までお前を連れて來たが、ユックリもてきない、お前と今一時間許りで別離しなければならない時になつて――純吉は跡は云はないで……沈んだ……秋子はさわ〳〵して常も何處かに浮々

してるところがあるのだが、其の晩は嫌に落付いて居た。私も貴方の御恩は忘れませんと純吉の顔を覗き込んで訴へるやうに、一二年ここで何か教へて貰つて了ひましたら手紙をお出し爲ますからね、お迎ひに來て下さいな。ねッ、お願てすからお宅の他の人に見せては嫌てすよ、私の手紙を、良うございますか、お願ひ――

純吉は快然と、いや、歸らない方が可い。立派に此宅から御嫁に行くと可い、又東京へ出て來る、――己は其の時は日本には居ないかも知れない、其れにお前は眞氣て云つてるつもりだか何んだか知れないもの。

あら、誰が――と純吉の膝に俯伏した。

純吉は背に手を當てゝ、己もお前を勿來關の叔父の家から奪去つて來やうかと思つた位だつた。己はお前を忘れやしない又キット逢ひにくる……秋さん最う時間！皆様に御暇して……病氣になつちゃいけないよ、――いゝかえ――

純吉と秋子は、腕を組み交へて、手を握り合つて出て來たが。其の部屋を出て、明るい處で二人は別に歩るいて行つた。そして母屋に分れを告げて、待つて居る俥に乘つて。未明の眞の暗にボンヤリと影のやうに立つてる秋子の貌をぢつと見て、

秋さん、ては良く御勸めなさいお强健て。……と純吉が云つた時、未だ眞夜半から、曉に間のある淡暗の裡に秋子の淋しい灰色の貌と。

ぽつと顔がぽうッと白く漂搖つて見え。腰を曲げて純吉の方を見て眼に手を當てゝ居た。それを見た純吉は、俥が其家の門を出ると止められないやうな溫い涙が眼の中に湧いて、何も見えなくもやがかゝッたやうになつた、純吉はそれを手の甲で拭き取つて……

俥が吉井を過ぎて餘程久留米の方に行つた時、思ひ出したやうに車を挽き返へさした。純吉は、車夫に命じて今出た豆田の家の少し先は、非常に可い景色だと謂ふね、其れを見やうと思ふのだから其處まで行つてくれ。路は彼の家の前を通らないでと……俥が秋子の居る宅の裏道を通るとき、止められないやうな涙がボタ〳〵と落ちた。

車夫は最う歩るけないと云ふので、俥から降りて、花月川の畔を歩むで、秋子と一緒に居た時の可愛らしさと、彼女の我儘なのを思ひ出してはもう一度秋子に逢ひたくなつた。歩を后に一里も行けば晤へる、けれど、意地はあつた。純吉は堪へて、一歩一歩と秋子の家から遠ざかつて行く程、悲しい苦痛が胸に込み上げてくる、自分の一歩が増々悲痛の里に踏込むのであつた。

四面の風景は、南畵にも無いやうな一種異様な茅葺の家の間から枝を出してる朱欒の黄色な實や、柿の赤い實が多羅葉の濃い綠の葉と色合の配合が、雅順な丸木橋や、はねつるべに釣合つて際限もなく云

ふに言へないうれしい趣のある川畔の風光は、痛ましくも秋子と一緒に見たいと想ひ到つたが。此處へ來る時、秋子に汽車の中で、中國筋の美しい風光を説明してやつたら、何とも思もはなかつた事を思つて。同伴でもだめだと思つたり。彼の時には秋子も頭腦が痛たかつたからだと思つたりして、今何をしてるのだらう……秋子の家には彼女の母の母が年を齡つても强壯て居り、且つ良い人だと思ふと、秋子は其の家で良くされ、幸福が來ると思つて見たりしてたが、又今にても大勢の書生と何かするのだらうと思つたり——花月川の水の中に散々、點々として丸石があるのに水が當つて、其處にヂィッヂッと靜かな音がする。櫨の紅葉が靜かな風に一と二葉落ちて、水の面に流れ

て來る。純吉は此の上流で見た葉が下流へ流れて行く――秋子がそれを見て同じ想をするだらうかと思つたが。……まだ滿にすれば十五にもならない少女の仕打を眞に受ければ、彼女は自分の事を思つてくれるやうな氣もしたり、しなかつたりした。こんなに自分が別離したくないものを、何だつて東京から此豆田邊まで連れて來たのだらうと悔んで見た。花月橋を渡つた純吉は最う一つの大山を越へて了つたやうな氣になつた。豆田の家で寄り處のないと云ふやうな顏して居た秋子の顏には、何處か浮々とした處のあるのを悟つた。彼方の溫かさうに木で包まれた岩山に櫟が黃櫨色になつて美しい、其山の麓に切つた木材が立掛けてある。土地の人に聽くとナバの木

だと云つた。純吉はナバつて何んだと聽くと、香蕈が出來る木だと云つた。純吉には香蕈と云ふ名詞は、何處ともなく悲しい思ひを呼び起さした。純吉は秋子と豆田の家で一緒に其の香蕈を食べた事を考へたら、堪らなく胸に込みあげるものがあつた。西有田邊の漢詩のやうな風景は、純吉の頭腦で秋子を配致して、其の風色と秋子とは淋しい聲をして訴へるやうに響けるのだ。その邊の丸石を土留にした田は、畑ともなるのである。二度の用をする大分縣地方の豐穰な土地を、……秋子も最早此邊の人になるのかと思ふと、哀れなやうな氣がした。豐穰で風光の絶美であることは有るが、決して都會の華やかの何時までても東京の人に厭ないやうな理由には行くまい

と思つた。純吉は又俥に乗つて、正午過の太陽を、雲が何處からとなく、むくむくと出てきて蔽ふのを見た。寒い風が俥の上で如何にも冷たく感じられる。純吉は寂寥な感じがしてきた。頰白鳥が枝に鳴いてるのも、深い秋の淋しさを感じさせる。純吉は淋しい思ひと秋子とを結び付けて、此純吉が秋子より十歳も上てあるのに、自由になつて少しの嫌がる處もなく、何をしても、何を言つても己の儘になる秋子の心を、純吉は眞面目に解釋することは出來なかつた。純吉は十七八歳の少年のやうな心持になつて遊んだ一週間前の其の時、餘り子供らしいのに、自分ながら顔を赫くした。ちよど其の時、純吉の側を籠に香蕈を入れたのを提げて來る美しい體格の可い女を

見て赫くしたやうに見られた、其女は耳際を赫くして居た。純吉は今の女は何處のものだらうと思つた。豆田の方へ行く……又秋子の事に思ひ到つて——自分の膝の上に居睡ると云ふ大度量、放けっぱなしの膽力を賞贊する聲は、歎美、舊懷、悲愛の餘韻である！疑いの禮式を重じ、似せの堅苦しい四角四面になつてる女が何んて尊い、自然の心の若い女の心身の一塊が、開放されて自己の物に出來る時程。其の女を尊く思はせるものはないやうな氣がした——純吉は其の時、其の女の崇拜者であり、伴侶であり、愛人ともなることが出來る時の、其の女の尊さは……尊き秋子さまと云ふのは心から悟つた言語であつた。神を拜する心と、女を思ふ心と、何れが

熱心になるてあらうと考へて見ても、其神より其の造つた女の方が、具體的てあり、有情的てあり、神の抽象的無情的に比すると崇拜と熱心の度を異にすると思つた。俥が柿坂に着いて、車夫が切りと此邊の風光、平凡てない事を饒喋つて、山陽の筆捨松はあれだと云つたが、純吉の頭には深い美感を味はせなかつた。俥が口の林に着いた時。黄葉の奇麗な木はなんだと車夫に訊くとエノミの木だと答へた。黄葉が如何にも飛び付きたいやうな色てあつた。純吉は其枝ぶりをスケッチしやうと鉛筆を出す内に嫌になつて了つた。俥が青に着いて。馬車へ純吉は乗り換へて、六人一團の連合の中に入るのが嫌になつたが、其内に一人の青年が、新體詩のやうな本を手にして

讀んてると、中途て若い女が一人乗り込んて、坐る場所がないのて、如何いふつもりか其青年の腰の上に腰を下した。純吉は其の女が如何にも大分縣邊の女のモデルのやうに肥へて、色が白くつて、何處となく秋子に似て居るのを見ては、見るとはなしに見て居た。其の女は何か考事があるやうに、ポカーンと空の方を向いて居たが男の上に腰を下してるのに氣が付かずに居るやうだつた。其男は迷惑さうな顔して居た。同乗の人は、老母と四五十歳になる年頃の男ばかり、之れを見て何とも思つて居なかつたが、純吉には變な感じを與へた。東京てあつたなら　……

馬車が洞門を過きて鮎歸りと云ふ處へ來たと云ふのは、憐人から純

吉が聽かされたのであつた。其四五人の男と老母は、土地賣買の話や、洋服の善惡の話をした。そして、はては純吉のロングコートの地質を切りと賞贊した、夕ぐれの風は段々と風色の變化の無くなるのに連れて。氷のやうな冷やかさを純吉は感じた。馬車が中津へ着いて、男の上に腰を下した女は暗に消えて行く、純吉は秋子を見るやうに其女を見送つた。關門行の汽車に乘る時、腰掛けられた青年も一緒に乘つた。

四

一人の寂寥な旅から純吉は東京へ歸つて來たが、うれしくはなかつた。何か忘れ物したやうな心になつた。云はゞ東京の自分の家に居

るものは、皆秋子の敵であるやうな氣がした。純吉は面白くなく、其の日を暮して居る。そして考へてる事はいつも秋子の事許りであつた。それでいつも秋子の顏貌を想像して見たり何かする——小さい顏、キリッとして赤い口唇、フックリした顏、丸い鼻、愛らしい靑く光る眼、眞白な皮膚は、目の前に浮むのであつた。あの白粉を塗つた時は、餘り白いので顏の輪廓が解らないやうになつたことや。秋子が東京に居たときは自分が表から歸つて來る時は一番先に惶てゝ玄關に出て來て自分が小さい肩へつかまつて奥へは入つて行つた事や何か考へ出すと堪らなくなつて、——ある日、夜なぞ外には一度も出たことのない純吉は、今まで行つた事もないのに、氣まぐらせに

藥研堀の年の市へ行つて、羽子板の繪を見た時は秋子はどんなに此繪を見て悅ぶだらうと沈んで了つた、嘗て自分が銀座へヴィオラを買ひに行くと云つたら、秋子は御願ひですから一緒に連れて行つて下さいと云つた時、何て連れて行かなかつたのだらうと思つた。純吉は秋子が家に居た時は、時には怒りに連れて叱りなぞしたこともあつたが、今は其の時に秋子の弱點の有つたことは忘れて、唯頭腦に殘つてるのは自分に持たれ懸つた可愛い貌ばかりてある、秋子を可愛がつて許り置けばよかたと思つて胸にこみあげて來るものは痛ましい寂しい感じ許りてある。

下男がお秋さんには驚いたよ。「神樣のお札を便所へ持つて行つた」

と云ふ事を蔭て聞いた時。純吉は限りなく痛恨の涙が湧いた。彼女は自分の教へた事が頭腦にスッカリ這入たのだなと思つた。迷信を排除せよとは、自分が常に彼の女に教へた事てあつたのだつけと—。純吉は芝まて用事があつた、歸り途に、日比谷公園へ這入つた。すると冬枯れの木の枝越しに半月が淋しく出ゞ居た。秋子は淋しいと思つて、この月を見てるだらうかと思ふと、向ふから丸ポチャの女を、青年が大切さうに寄り側ひながら手を引かれ歩るいて來る。純吉は美人でない普通の容貌の女を大切にする心が知れないと思つたが、今其の二人て來る女の方は、如何にも秋子に似て居るので。其青年は自分よりも後悔しないだらうと思ふと、同時に、自分の今ま

ての秋子に對する心持が、秋子を心から滿足させるに足りないといふことは、子が母から生れたやうに、暗の界から光の場所へと導かれた。なぜあの時叱つたのだらう、なぜあのセビッた時に一緒に連れなかつたか、己が惡い。許してくれと獨語した。

五

純吉は秋子の處へ手紙を出さうと思つて、長い長いものを封に治めたが、先方で、其の叔母や老母に何か變に思はれるのも嫌なやうな氣がしたので出さなかつた。それで何としても秋子の事は忘れる事が出來なかつた。外出して秋子に似たやうな顏の女の子を見ると、理由もなく戀しくなる。其れて家に歸つては、面白くない書齊の淋し

い空氣と、家人の面白くない集合を見るのも嫌やだと思つた。純吉は時々眼の濕つてる事がある……色々な事のあつた新らしい昔の印象は心の裡で再現されるのである。純吉は何か遺物になるものがあればいゝと思つたが、其れもなかつた。唯一枚の寫眞が少女の面影を傳へるものゝ、其は餘りに肉の香りから遠ざかつた、淋しいものとしか思へなかつた。

春になつて、七種を過ぎる頃に、年始狀が屆いた。其れは姪の處に宛たのであつたが、鉛筆で世間一通の事しか書いてないようだ。自分の處へは男の四角張つた筆跡で、謹賀新年—竹家秋子としてある許りだ、其れを落手した純吉は、餘りのあつけなさに氣がぬけた。

何んぼ劣筆でも秋子自身てくだらないことでも何でも書き付けて送つてくれたならうれしかつたのに……この他人行儀……純吉は哲學者のやうな頭腦で、女は皆んな終ひにはこうなつて行くのだと歸納して了つた。純吉はイライラした氣持を直すことが出來ないで、床に這入つた。そして無意識にノートルダーム、ド、パリの繪の處だけ見て行くと、エスメルダと秋子、其本の彩色の色合は、如何にも瓦斯の光りて、秋子の肌の色と同じやうに見へる、紅桃色の林檎を白い吉野紙から透して見るやうな色——美しい秋子の肉體と思ひ出すと色々な舊い思ひを連想される、一寧又豆田まで……と思つても見たが……何處だか知れない、高い山の上に女があつて、それが秋

子て、今私は如何爲やうかと思つてます、叔母さんも叔父さんの手前で。私を、さう可愛がつては下さらないんてす、……私を連てつて下さいな。私、てなければ……純吉は如何してこんな山へ來たかと聽くと。又、變な奴に連れらてこんな處へ賣られたと……純吉はあつと思ふと夢から覺めた。——彼は堪えられないやうに涙を枕て拭いて居た。空は曇つて居る、純吉は下座敷に降りて行くと、天氣になつたら張物するのだと、姪が色々な布片を出して居た。

純吉は書齊へ這入ても、夢に浮んて來た秋子の貌は眼から離れなかつた、……純吉は夢のやうな山に、秋子に似た少女が居るのかと思つて、其日東大久保から甲府の方へと旅行した。其處には山の連り

があつた、けれども、女は見出されなかつた。……純吉が家に歸つたのは五日許り過ぎてからであつた。

六

秋子の姪が、秋子から手紙が來てますと云つたのを讀んで見ると自分に宛たのではないが、……手紙には一惡漢のやうに見做されてた——其の理由は純吉には解つた、お久米の處に兄が居る、兄と秋子とは、兄は秋子を思はないが、秋子は切りと兄を思つて居たから、手紙を出したのだらう。すると兄はお久米に丸められてる者だから、お久米の教唆通りに豆田の家に手紙を書いて出したのだ、すれば豆田の家は其を信じる。少女の言語よりもこの兄とした男の言語

の方が信じ易くなる。其に豆田の家は書生の澤山居る家で、秋子のやうに浮々としたものには何も彼も忘れて現在の自分ばかり考へて行く、面白い生活てあるのだらうと……其處へ運ぶ運命にした本人は……勿來關で二人並んて歩いた夜『東京へ來ないか』と云つた一言が遠因で……遂に東京へ來、鬼のやうな惡婆の手から離れて……遂に暖かい南國の町の豆田へ行けたのてはないか……其れは幼な心の皆忘れて了つた。唯一と云はれゝば一、二と云はれゝば二、衣類を澤山こさえてもらへば其がうれしいのだらうかと思つて、——このやうな女の手に依つて書かれた書面を見た純吉は、夢を見て行つた旅の何も得られないて。夢にも思はなかつた心が、秋子にあるのに驚

いた。——如何したのだらう。こんな手紙を……姪も恩知ずだつて怒つた、が、純吉は良く女の性格を知つて居た。

姪が布片を探して居たが、これがあの薄情の秋の一重衣の布端ですよと云つたのを純吉は見て。己にくれ、と盗むやうな眼てそれを懐中に入れた。秋子が其の浴衣を着て純吉に寄り掛つた衣類の小布てあつた。純吉は忘れられない懐しみの匂があるやうに思つて。純吉はそれを何處かへ持つて行つた。そして、もう秋子が永世に來ないやうな氣がした。其れてもう永久に逢ふことができないやうな淋しい音が、其小布片から聽き取られた。

* * * * * * * *

水色の戀

一

僕は驚いたんですよ、あんなにドナられたんですもの。

花子は下を向いて膝の上て兩方の手の指を組み合せてクウッと力を入れて引離さうとしたり何かして指を弄びながら、中の姉があんな大聲したんですよ、私はあの時臺所に居たんです、それにちよッと、まごつく處ですよ、道路のやうに見えますから、俥を御挽込になつたのでせう。あんなに跡でわざわざ御謝りに入來しやらなくッてもよこざんしたてすのに。……

否え其れは僕はホロの裡でわからなかつたにしろ他人様の御庭の中に車を引き込むとはパンですからね、……もうそんな話はよしませう、それで、……その原因て斯うやつて二人が話が出來るやうになつたんではないでせうか。

貴嬢は四年級でしたね、すると數學何を敎はつていらッしやるの。

――「代數學。

難解でせう？　「エヽ。

立派な口はきけないのですけれど御敎へしませうか。　「エヽ、

ほんとですか。

何處いらです。　「一次方程式なのですよ。私ね、理論がどうしても解からないのです。花子は其の時、恰ど暑中で學校の方は休てあつたから、毎日もやの漂つてる朝早くから秋成の室に現はれて、方程式の理論を質問したり何かした。

赤いメリンスの帶を締めて、白い浴衣地に牡丹の黒い花の中形の衣物を着てゐる花子の貌が現はれると、甘口に料理を製へた。花子は甘いならどんなでも驚かないと云つたからで、それで秋成は辛いならどんなのでもいゝと云ふのだから、秋成と花子とビールを飲むにも花子は砂糖を入れて飲んだり食事の肴も別に蒸るやうなわけてある。別の方向に極端な味好をもつた男女が毎日一緒に膳を並べて食べた。二人は食た後で唱歌を歌ひ出した――

——空——に、さえ——づる、鳥——の——聲、峯——より落つる瀧の音……

それが終ると千代紙を切ッて紋形を造へたり何かしてると、夕方になる。

御飯でございますと下女が知らせて來る、二人は食室に這入つて行く……

花子の歸るのは夜の十一時頃で、秋成は必ず花子の宅の前まで送つて行く慣になつた。

花子の家は巣鴨であつたが大久保の秋成の家から花子の歸る時は、もう人通りも少くなつた半夜中であるから、夏でも寒い位に冷える空氣は二人にあたつたが、冷るとも感じないらしい。話は輪を廻つ

てはくつて來て極りが無かつた。——時には先方の宅に上り込んで十二時頃までも姉達と話をして。眞夜半の一時頃、一人で夏の風に吹かれて大久保の家へ歸るのは二時頃になつた。花子はいつでも、どうか御願ひです。送つていただくのは有難いんですけれどもすみませんから止してくださいまし。花子の姉等も御送りになれば妹を訪はせませんといつたが、秋成は未だ電車のない時分で、徒歩の效力と、何に往復に四里や五里ぐらゐ、反つて足の爲にいいのですと言つてゐた。時に夜の十二時頃まで花子が秋成の家に遊んでるときは、秋成はなるたけ道を遠くして歩るいた、花子は反對しなかつた。

私ね、先日大雨の日にお友だちの處へ行つて、宵てしたけど、歸り

道の氷川神社の下の處の溝が開いて了ひましたんてせう、私が素足でバチャバチャ水の中を渡つて中程まで行くと。ポカーンと深い處へ落ちて了つたのです。

御負傷はなかつたのですか、どこも？

エ、乳の處まで水が有りましたけど何處も痛めませんでした、貴方が一所で、もし御覧になつたらと、一人でクスクス笑つて——可いよ、秋成はさうでせうともと其寒さを想像した。

もう植物園の處ですよと秋成が云つた。

あの聲は。

あれですか。

——ホーウ、ホウッと。

えゝ。

あれ梟ですよ。

梟つて。

鳥ですよ。

鳥の聲ですか。

さうです。

淋しいんですねと花子は秋成の側に寄つて來た、淋しい時は二人がいゝてせう？えゝと花子は何か考へて……

二人の中には變な線が流れて斷えず二人の體の周圍に輪のやうにめぐつてるように見えた。「僕は淋しいのが好きです。

私も全く好きですわ、と快心したやうに答へた。

眞實に淋しいのは可い、だけど一人て淋しいのより二人て淋しみを味つた方が可い。

私も全く。

秋成は街燈の未だ彼方此方についてる夜の淡暗に、浮き出してるやうな青白い女の色を見るとはなしに見ながら歩いた。花子は男の口を見るとはなしに見ながら歩いた。

秋成は急にガサガサと高い處を歩いたと思つたら、最う花子は小石

の積んである上に轉んで居たが、直に秋成の手につかまつて立つた、

秋成は其の時ちよつと女の手の溫を感じた。

秋成は、餘り上の方許り見て歩くと下の方へちつとも氣が付かないから轉ぶのですよ。王族の生活をしてるものは、下貧民の生活狀態の眞相は解らないやうなものですよ。

花子はなんだか微笑して下を向いて何か考へて歩いてる——

最うお宅が見える——では此處で御分れします。

花子は、すがるやうに、ちよッと家へ御上りになりませんか。

いゝえ又長くなりますから、こゝで。

家の人に知れてもよいでございませう。

いゝえ夜どんな惡い奴が出ないとも限らないんですから御送りするんです、それに早ければですか最う十一時半にまはりましたらう、僕は宅に歸ると一時半になる、……ではこゝでと早足に十間ばかり來た道を歸つてちよいと後を向いたら未だ花子が貌の輪廓も暗に消えて、只ぼうとしたものが立つて白い顏が腰の處邊へ來たとき秋成も頭を下げた、そしてだんだんと二人は消えて行つた。

秋成一人歸り道を歩いて……彼女が我を戀してるのだらうか、我が彼女を戀してるのだらうか。それとも戀からは全く離れての心持なのだらうかと想つて歩いた。濃卵色の月が東の森端から現て來た、上弦が缺けてる。微かの光がだんだん廣がつて力づいて來るのが、黑

い暗の砂に、白金色の潮が寄せて來るやうに思つた。夜半の十二頃になると、家々のランプの燈火が消えてる家も消えない家もある、その消えない家々のランプを見ると、どの家のでも硝子に守居がついて火に憧れて、離れまいと努力してゐる樣子が見える—その火も消えさうにボンヤリとついてるのだが……そんな火にも二重に憧憬者があるんだ、蛾は燈火を戀してるが—其の戀してる眞の心持は、晝を戀してるのではないかし。晝らしい明さを持つてるに似た燈火が、其の戀してる晝の憧憬を滿足させるのではないかし、それは濃いものに憧憬して淡い——其の濃さのずつと淡くなつたもので滿足して一生を終るものもあるやうだ。守居は火を戀してるのではない、

其の火に集る蟲類を生活の資料に爲やうと思つて、自己の生活——如何しても是等のものを缺いては生きて行くことの出來ないものを得ようと思つて努力して、あの洋燈の硝子にシッカリと吸ひ付て離れまいと力をいれてる守居を見て。目的もないのにドンドンと火に近づいては、パラパラと下に落ちて行く蛾の燒死と。時に守居の口に這入る變死を見て。——秋成は小さな蛾の飛んでるのより大きな守居の黑い影を哀れな淋しい努力だと考へて……

宅へ歸つたら、月は高く登つてた、秋成は床の中へ這つて、窓の硝子に黑いものがあるのを月の光てよく見ると守居だつた。それから其の晩は睡られなかつた。

秋成の生活は解からぬ戀？　のやうなものゝ爲にずるずると引かれて行くやうなものであつた、花子と云ふ影は眼の裏に深く印象されてしまつた。けれど、心は別に働いてるやうな氣がした。

身體の大きい小兒のやうな顏の婦人が部屋に現はれるとき秋成は心より眼の働きが先であつた、貴孃は赤い色がお好きですッてね、さうですか。

えゝ

如何いふわけて赤い色が好きですか、

なんとなく好きなのです。

二人はこんな問答をして秋成は花子に赤い花を與へ、花子は持つて

來たレース糸の桑を秋成に渡して私が編みましたのと恥かしがつて渡したり何がした。二人の心は夜遲く月の光が空一面にすみ渡るやうな美しさに、堪らないやうな靜かなしんみりした落ちつきを感じた。二人は窓の所へ坐つて限りなく遠くの方を眺めて居た。

私、なんだか御腹が痛くなりましたから。こゝえ俯伏さして下さいませんか、

えゝどうか、

貴嬢はどこのところが痛いんです。

エ、エ、と座蒲團の上に俯伏してる花子に負ひ重るやうにして聽いた秋成は、花子の後から何處が痛いんです、ことと？　何氣なく御

腹の處を押した、

アラッ、そんな處押しちや否やですよ、と青白い顔して立直つたのて、秋成はすみませんてした、と顔は赤くなり胸はドキドキして、僕が惡かつたんてす、御免なさいね？　僕は謝ります、花子は默つてゐた。

その日秋成は花子を送つて行ッても、三里ばかりの道を無言て歩いた、花子の家も見えて來たので、秋成は分れやうとして花子に、僕は貴嬢と交際するのを止めませうか—

花子はやるせないやうな眼をして見て居たがやがて、なぜてしやう？

何んだか僕と貴嬢とは餘程はだかつてゐるやうてすから。花子は、何がてしやう？

秋成は思つてる焦點がてすと云つた。

花子の顔色が街燈のボンヤリした火て輪廓がボカしたやうにボーッと消えた顔と手足が青白く浮んでた。花子は今まて通りにしてはいけないのてすか……淋しい語尻が夜の露に溶て行くやうだつた。秋成は亦明日お出ください、僕は待つてゐますから。それて秋成は歸り道に、一寸押す位て、あんな聲する女、嫌やだ〳〵と思ッたが、又其の押した時の柔かい、身體の彈力性に感ぜずには居られなかッた……秋成はずるずると花子の影に引かれてゆく……

花子は秋成が玉川見物に行くといふ前の約束て、秋成と玉川へ行つた。電車が二子に着いて。乾いたホコリのたつ道路の草の呼吸にムウムッする中を二人は暑い暑いと歩いた。

遠い山には風の雲が見えた。二人は丸木橋を渡つて、豆類の植てある處を通り貫け、蛇籠の堤のある川原に出て、二人は蛇籠の上を歩いて川原に降りた。渡し船に乘つて向岸に着いて。又もムウムウする暑い茂ッた野草の道をせッせと歩いて田舍街道のやうな處へ出てから七面山に登つて行つた。昇ッた山の頂から見ると風が川原に吹き渡る樣は凄いやうて、黄色い砂が舞ひ上るのは戰煙のやうだ。雨の雲さへ見えて來た。松の喬木が自然のまゝて趣きがある、其木蔭

に藤袴が澤山生えてる。秋成はそれを取つて花子に與へた、二人が木の切株の所へ腰を下したとき、秋成の側へ頭髪をザンギリにした白痴の女がフウイと來た。そして身體をチョッチョッつまんだ、秋成はゾーッとして花子の方に身體を寄せた。白痴の女の灰色の顔がニヤリニヤリと笑つてダンダン秋成の側へ來るのに、秋成は氣味惡くなつて叱つたら、消えるやうに歩いて遠くに立つて居た。秋成も花子もキビはるいので其山へ深く踏み込んで女の影から遠ざかつた。秋成は山逕の叢に咲いてる白い野菊の花と地楡の黑鰕色の花とを折つて花子の手に握ぎらせた。

貴孃此處はかなりいゝ景色でしよう、

花子はエヽと、うれしさうに云つてた、二人が川原へ歸つて來たときは西の方の空が赤樺色になつてゐた。

二人は川の水で顏を洗つた、そして花子が水色の着物の裾を右の手でかゝげて素足でチャブチャブと水に這入つて行くのが夕暗の景色の裡の繪のやうに浮んだ。歸りの電車に乘つたとき、秋成は花子の側に腰を下して、氣長な電車だ、田舍はやッぱり田舍だと云つてゐた。

* * * * * *

秋成は花子が何んだか自分に係はつて居なければならないやうな氣がした。そして其れが係さはつてるよりも一體としてしまひたいと努力した。虛僞の力を眞實の努力で展開して來るやうな、恐ろしい

やうな戀をしてみやうかといふ心になつた。

廿六夜の月が現るといふ晩に、花子は秋成の部屋で一ッの窓に二ッの顔を並べて、空に走る星の數を四ッの星がニラメッコしてゐた。

花子の廿六夜の月はお上りになるとき三ッに見えるのですつてといつたのを、何に一ッだと秋成は取消した。

其れは眼の徒です、三ッに見えると眼が定めたのです、……そのうち月はのぼつて來た。チラチラ光つて三ッに見えますのと花子はいつた。

秋成は僕にはどうしても一ッにか見えないといつた。二人に寄り付いて來るともなしに寄り付いてしまつた。秋成は花子の肌の香臭く

、と花子は男の眼を見てゐた、夜は更けた。

僕が貴嬢を愛すとしたら貴嬢は？

貴方は私を、

エ、僕は貴方を愛す、貴嬢は？

私は考へて見ましやう。秋成は花子の發育のいゝ腰の邊を見てゐた。

秋成が眞實の戀に生きやうと努力して居たとき、虚僞の戀ではないかと花子は疑つて居た。秋成が虚僞の努力を現出して來たときは、花子は眞實の戀だと思ひ込んだ。

秋成が悦樂に生きられるのはどうしたらいゝかと花子に質問を懸けたのは口説の新しき型のやうなものであつた。そして種々な文章を

書いて花子に讀ませた。戀愛の記號といふ事は如何云ふことをしたらいゝのでしやうか、貴嬢は御存じですか――

えゝッ私に……イヤ……です

斯ういふ奇問に二人は日を暮して一つの机の下で足の母指の踏みッコを爲たり、チョッと足と足とが合さつた時も。秋成のするのを花子は除けなかつた、花子は四五日續いて泊つた事もあつた。

花子が湯に這入つて、淡化粧して出て來た――秋成は桃の花のやうな頰の色と、濕りて光つてる眼を見たとき、若い水々したあどけない貌に心が食ひ入つた。花子の手をゾッとして恐は恐は取つた、そして小さい聲で貴嬢は考へて置いた――?……あのこと、を……

秋成は花子の顏を覗き込んで耳を口の處へもつてゆつた、花子は微かな言で……貴方の可いやう……秋成はブルッとして花子の首に手を掛けて自分の顏の方へ引き寄せた、が……

秋成は深淵に沈溺をすることを止した。驚くべき反省の力は、「己は今死んで後に生きられる」と宣言した。

秋成は間が貫けたやうな、負ッてた重荷を下したやうな氣になッて自分が未だ何時か樂しい生きられる時をあるものに預けて置くやうな氣がした。

春生の四月半過ぎくらいの暖さが秋にもある、ポカリポカリと室の下の方から暖められるやうなヂッとして坐ゝては居られない日に。

今日あたり何處かへ行きたいと秋成は思つてたら、際よく花子が來たので、吉祥寺に秋の尾花を見に行かうとときめて、大久保から瀛車に乗つた。吉祥寺の停車場を出て、踏切を横ぎッて、南の方へ通り貫けるとだらだらの下り路になる。尾花や藤袴が咲いて、サアーサア初秋の風に小さい音をたてゝる。二人は其の路をドシドシと降りて行く——日蔭の冷たい風に凄いやうに空氣の清み渡るような杉木林のトンネルを脱けるとき、井の頭の池の方を見ると池の面には葭が一面に生えて、ギョロキョロと鳴いてる鳥の聲がする、花子はあの聲何んでしょう何んて鳥なんてしよう、彼れは葭雀(ヨシキリ)って言ふのですよ、

やつぱり鳥の聲なんですね、
さうです
あのお宮殿(みや)は
あれは辨財天(べんてん)です
辨財天て、なんでしやう
貴嬢のやうな美しい女です
あらッと耳のところを淡赤くした。
ほら橋がありませう、苔だらけな—ほら—此處(こゝ)と二人は橋の上を渡りながら池の中を見た、清水(しみづ)で底が透(す)きとをッて見へる、水草が底の白い土からユラユラと漂つてる、水(みづ)は動かないで凄く見える、

其草の間を蝶螈(もり)がチョコチョコと泳いで來ては、ポカーンと浮いて自然に自分の體の浮く努力を除いてしまつたやうにダラーンと沈んで行く――秋成は其の有様を何か暗示てもあるやうに思ひながら見て居た。秋成がこの上の景色は又可いのですよと云つたので、花子は池の傍の山の上に登つて行つた、秋成も後から續いた、この山から見る景色はどうです、なかなかいゝでしよう、エヽと、さやけき秋を、うれしいやうな眼付して見て居たが、やがて。私もつと此の山の深へ行つて見たいと花子が云ひ出したので、秋成も一緒に百間ばかりも歩いて行くと、廣々した凸凹の地形態(なり)に畑が一面に蕎麥だの黍だので埋められて居る。秋成は道端の野萩(のはぎ)を取つて花子に渡

し、もう歸らうと云つて山を降りて池の廻りを歩いた。池の畔て二人が、側に居た農夫に話しかけられて、この池で何頃(いつころ)に誰が死んだ、彼が死んだと話された時は。其人達が、未だ此の波のない死んだやうな池に埋つてるのではないかと思つて、淋しくなつた。秋成は突然、貴嬢いつまても日が暮れないといゝんですのにね。日が暮れないで夕方ばかりだといゝ……

私もさう思ひますわ、何時までも、あ……

エヽと聞きたゞしたので花子は笑つてゐた、

秋成は何時までも淋しい心持が逃けて行かないと可いと云つた。

花子はこんなに淋しいのは嫌ですわ、

花にすれば貴嬢はどんな色の淋しい花……　私？
赤です、
僕は黑です、
灰色の夕ぐれはだんだんと黑くなつてゆつた、二人が停車場の前の小賣店の前を通つたとき、秋成はあの柿の色ですね……
まだ貴方覺えていらしッたの？
そう早く忘れなければならないのでしやうか何事でも、
貴方は變な事仰有るのね、
二人が瀛車に乘つた時、秋成は斷へ間なく腦に響ける汽車の音に不愉快な淋しさを味つた。

夜の闇は眞つ黑で。その中に赤い光が彼方此方で二ッ、四ッ、五ッとふへて行く……明いたり消えたり
其れは村に点く燈火であつた。秋成は汽車の窓から其の光を見て、遠い先の方を見やうとして居た。花子は秋成に寄り懸るやうに坐つて、暗に消えて了つた盡間の景色を想像して見て居た……。

無星神叢書第四編

大正三年十二月廿五日印刷
大正三年十二月廿八日發行

不許複製

著作兼發行者　東京市牛込區原町二丁目十七、十八番地　米本悅三郎

發行所　東京市牛込區原町二丁目十七、十八番地　馬上大學社

印刷者　東京市麴町區紀尾井町三番地　金澤求也

印刷所　東京市麴町區紀尾井町三番地　元眞社

定價金拾五錢

社會新聞

大正四年四月初旬創刊豫定。
新人の集合で時事問題解決。

本新聞は萬人の心のパンたらんとを期す。

月刊か、週刊か、日刊か、そは未定である。

なるべく多數の共同者を望む。

賛同の方、合同の方が多い時は日刊にする。

この新聞の産聲を發せさせようとの御希望の方は當社に御訪問を乞ふ

馬上大學社

無星神叢書（チオスピンクス セリーズ）の由來

睡れる獅子よりも叫へる犬の方が用に立つとは西歐の金言である。私はその獅子にならうと思つて今まで、睡つてゐたのでもないが。社會の一隅にでも生存してゐる以上は何か他の社會員の爲に利益のある方法を計畫しなければならない。私は何も出來ないが只道樂が讀書と出版である（最も馬も好きだが）其でその道樂を利用（と云つてはすまぬ理由であるが）して出版のことをして見た。私は本叢書の出版を他の商人的型（コマアチヤンヂイプ）の叢書と同一視されては困る。私の叢書は賣れようが賣れまいが何れでもいゝのである（そりや賣れた方がいゝけれど）それで裝幀なども更に意匠を用ひないで自分の畫いたネオの像を商標的に使用して自己の著である代りの象形文字的に使つた。私の思想は統一してないのを自覺してる。讀者の方々はその心で讀まねばならない。叢書も若し出版の費用が續くならば何百でも何千でも何萬でも自己の精力の續く限り出すつもりであるから編を重ぬるに從つて何程か統一も出來ようと思ふ。けれども今は著者も廣漠たる野を行くように學藝界の迷路に這入つてるのであるから。そのものゝ告白を讀む方は無統一の書の幼稚なのを敎正せられ給はらんことを乞ふ。

一人著書　米本無星神（チオスピンクス）しるす

□無星神叢書（ネオ、スピンクス、セリーズ、）（内容及び目次）

（本叢書は皆無星神（ネオスピンクス）一人にて作り校正し裝幀する（且印刷と發賣を除く）を特色とす）

1 東京馬米九里

定價 金十五錢

私が馬上で東京近邊九里内外の處を見歩いたとき、鞍上で書いた感想記で。四季の景色と社會の有樣、それに私の現代に對する希望や悲哀を書いたものです。

目次

自然と自分（初序）
馬の脚力
一月の冬
二月とクーデター
三月初めの野邊路
彼岸の頃
大火のナポレオンと由比正雪
築地邊と小兒の戰爭
四月の櫻……四方の景色
向じまの櫻と荒川の櫻
女の眞心
川口と赤羽
甲州街道と小金井
葉櫻の世界と五色櫻
飛行機と我國
一代の悲しき經驗（五月と六月）
心變り（中序）
生より死に
死せる我が師に
馬上より田舍の農士に
馬上より皇帝の名に
馬上より新聞記者に
馬上より殖民と移民に
馬上より警官に
馬上より淺草にブラツク學生に
馬上より東京市街の美術に
馬上より閑人に
馬上より兵士と勞働者に
馬上より藝術階級に
馬上より文學者に
私を馬が自然の中に運んで（七月と八月）
殘暑（九月）
秋と群集（十月）
赤き紅葉からの黃金の茶の色（十一月）
もう氷の町（十二月）

2 藝術政治と軍學

定價 金二十錢

最も古き王國は最も新らしい希望の王國と近接してゐやしないか。藝術と政治の近接、軍學と藝術の融合、革命と藝術の關係。英雄の政治と軍法を說いたもの。

目次

（一部）
藝術的國家創造論
憲法の改正と革命
軍の統師
理想的軍隊
人間の動物化と戰爭の數學化
肉的慾望と戰爭市場
藝術と戰術
アレキザンダー大帝シィザアの戰略と人
種改良政略
藝術戰略と科學戰略の分水界として
の大ナポレオン
アリストトールと亞歷山大帝、シィザアとシセロの政治
ルソーの試演とナポレオンの藝術化
軍學
（二部）
綠青政治
政治は藝術の一種なり
無言政治
藝術政策
赤色政治
大臣と法律學
人間の黃金アルコリズム

3 小説 清交怨

定價 金十五錢

悲しき戀よ、清き交を續けて七年、青年は自己の理性を養つて感情の自由を許さず遂に清き交りの裡に女と離れる。されど、青年は清き交りの當時を追想して、怨なき能はざりき。されど戀は聖きものなりてふ藝術的修養は、青年の生活をして全く肉體を離れた精神生活に入らしむ。

4 小説 花月川

定價 金十五錢

藝者に賣られると言つた女を助けた青年はその女を愛さうと思つたが、靈の力が勝つて排けて了へとその青年は愛女を東京から久留米まで送つて行つた。そして淋しい一人の生活を哭き又その愛女を思つて、その女を自分の側に置きたいと思ひ〳〵一日を終る。

附 小説 水色の戀 謎のような靈の戀はうれしきか、玉川で水色の衣物着た女よ。そは戀にてはあらざりしか。されどされど、よも戀にてはあらざるべし

戀は水色の如き褪め易きものにあらざるべければ……

5 ホワイト孃よ

定價 金十五錢

絶世の英國美少女に戀せし青年は、不可思議にその少女と談話するを得たるも、遂に又會はず、失戀ならざる藝術の淋しき新生活に入る。死して行くような生活のアキラメと戀の不可思議なるの誘導を疑へ。

6 パンの政治

定價 金十五錢

新らしい政治は一人にパンを與へることから初まらねばならぬ。兆人に不足なくパンが行き渡れば。それからどんな仕事も出來る、そうして新らしい人間の王國を型成するとも出來るだらう。

目次

新革命の微光
農學上の新發見と社會組織の革命
工業的生産行爲と階級戰爭
軍隊の社會主義
軍隊と産業教育
軍界と馬、無政府治下のカケルとカケル
醫術に於ける新舊の學說
個人商業と社會商業
女からの女
宗教の藝術崇拜化
藝術透視の法律
創造的音樂
圖書哲學
圖書の善果と罪惡
圖書と政治
ペンからパンに
パンからペンに
パンの科學
兆人パンの爲めの科學研究法
パンの政治
パンの藝術

7

新詩 みちばたの草

定價 金十錢

この亂雜な自由詩は天下萬象を一册の中に書き集めて自分勝手な意でその詩調を取つたもの。

目次

一 ギオリンの女
二 花散村
三 白い光りと黑い花と灰色の生
四 心のペンの夢
五 Devil の笑の Explosive
六 小破壞者
七 草食ふ小羊
八 櫻の下で
九 命の動き
一〇 ヒヤシンスの花
一一 冬の田舍の一月
一二 雲の顏
一三 動かない梅
一四 觀樂の側觀者
一五 八ッ手の實
一六 危き心
一七 青い町
一八 夾竹桃の花咲く頃に
一九 のびた春の若草
二〇 眼のない馬
二一 みちばたの花草よ
二二 みちばたの草

8

小說 モヤの女

定價 金十二錢

活動寫眞の暗黑を利用して男子が女に寄つて行く、そうして男の肉の動きと女の肉の動きを描寫したつもりなり。其他に左の數篇を收む

小說 **自分の一日** 自分の生活を小說化したもの。

小說 **他人の一日** 自分から全く離れた他人の生活を小說化したもの。

小說 **自分の眠想から死の經驗** 自分の經驗を小說的に書いて見た。

小說 **新カチューシャ** 際物的である。

9

鞍上と机上

定價 金十五錢

これは東京馬米九里の續編で、又日本馬米九里の端緒である。

鞍上と車上と机上と徒歩から得た感想を書き集めたもの。

目次

鞍上より（初序）
馬上帝大涙人
帝國大人樣に
馬化帝
女動物園
藝術政治の眼より透視
した現代議員分類
スツテンコロリン
初春の隅田川
梅の花とカワバタヤナギ
ギラングの會話
ZAMA
櫻は寂しき花なりけり
墨堤
田舍下！東京から
大博へ廻りを約五分
大久の保のつゝじ
馬上と机上
雨の日と風の日と晴天
淫樂の町
竹屋の渡
小梅橋の月
夜の業平町
雨上りの元金杉と日本堤
電車人相學
發賣禁止と公娼と政策
新聞の裏面
時事問題は面倒だ
理想から觀た政治
西班牙歩と馬の賢
市會議員
堀切の菖蒲
横濱の夏
合歡花
挾竹桃の花
戸山の原
私の一人豫言
百度の日中遠乘記
品海にある私の別寓
鈴ヶ森の夜
大風の蹟
巡公を叱り飛ばす
歐洲一撰
二百哩近途歩行
池上と川崎
大宮公園と浦和の秋
立會川の秋の夕ぐれ
鶴見神奈川後にして行く
横濱の秋の夜
青梅より澤井まで
袖ヶ崎
末世の日蓮
八幡海岸
雨の横濱
大衝突ボーギー車上の私
机上より（終序）

附錄 日本馬米九里端緒 百哩長途騎行

一人記者 NÉO SPHINX

人間新聞

一部 金六錢
毎月一回一日發行

大正四年一月一日を以て創刊の一人新聞である。この最小新聞が馬上大學なる一人雜誌の双生兒たるとを告白する。馬上大學は純正な研究的態度の雜誌にして、この一人新聞は純正な評論的態度の新聞たる事を期す。併し、時事問題を積極的に云々するものではなく、專ら消極的に時事問題の結論に對する社會哲學的觀察の評を下さうと思ふのである。この新聞は純正な評論哲學の地盤よりは當分外出しない事を告白する。それは一人記者の事であるから手が廻らないと、私の世間見ずなのと時事問題を云々するには他に大新聞大雜誌があるからである。

讀者の投書は御隨意です。

人間新聞の內容は左の十一部より成り立つ。

口繪　趣味あるものを載せる。

法政評論には新法政學の見地から時事問題を論せずしてその結論を評論する。

社會評論には社會に起るべき新現象の報告、舊社會の構成を解析する。

兵馬評論には新軍學の博道と天下大亂の時局哲學觀と騎馬の新術を紹介する。

商工評論には新事業の報告商界新人物の修養法、新工商學の報知。

產業評論には如何にして產業國になすべきか、如何なる新科學が產業界にはあるか。

藝術評論には新藝術の創造、新藝術の評論、新藝術の飜譯を載す。

科學評論には日進月步の科學に對する照介、世界の物質的文明の燈明臺。

出版評論には日進月步の出版界に對する評論それと新聞雜誌の評論を載す。

女子評論には家庭を幸福になす方法、新らしき女の行く道、女子の新らしき學藝を說く。

衞生評論には社會衞生、個人衞生を說き人間の生命の長久を慾す。

一人記者探訪記には一人記者なる私が四角八面に飛び廻つた探訪の事實を載せる。

一人雜誌 NÉO SPHINX

馬上大學

大正二年四月十日第三種郵便物認可
大正四年一月 第三卷一號 發行
一部金十二錢 毎月一回一日 發行

大正二年四月七日創刊の本誌は雜誌の生命を幾度か死生の間に浮沈しつゝ本年に至つた。併し今は第三卷を發行するの盛期に至つた。

馬上大學は純正な學術雜誌であると、それが爲めに以後の雜誌は講義錄的に分本の出來得るように印刷せしめ完成の上は各一册の本になるような便利を讀者諸卿に與へる。

讀者とは誌上で學術上の討論を交換するとが出來る。

讀者の投書御隨意です。

馬上大學の內容は左の十一部より成り立つ。

口　繪　自畫を載せる。

藝術大學部は哲學、文學、(自作の小說、新詩、隨筆、感想、劇、評論)美術(繪畫、彫刻、音樂、建築)を載せる。

社會大學部は社會學、法學、政治學、經濟學、財政學、統計學、史學、教育學、宗教學を。

兵馬大學部は軍學(軍政、戰略、戰術、戰史、兵器、築城、地形學等)馬術及海軍學を。

生活大學部は農、林、畜產學、醫藥學、工業其他一般の發明科學、商業學、殖民學を。

自然大學部は物理、化學、人類學、生物學其他一般の自然科學を。

女士大學部は家庭及び女子に關係ある百般の科學を羅列する。

宇宙大學部は宇宙の構成に關係する知識、地學、星學、數學等の記事を。

一人圖書館月報——私の編輯室に屬する記事。

ネオ、スヒンクス會——讀書諸卿の葉書集。

一人出版月報——自著の目錄と內容を著はす。

附屬博武會馬上學校記事——自創學校の記事。

是を讀むは經濟的也

大正二年一卷一、二、三、四號の合冊箱入（再刷新本）

一人雜誌

NÉO SPHINX

馬上大學

IIII. III. II. I

四冊總紙數五百頁弱特價四十錢

五號以下二卷全部殘本なし

容内

一 馬上大學と私論
二 ネオスピンクス哲學
三 評
四 小說 花月川
五 小說 水色の戀
六 小說 清交怨
七 後の清交を怨むの記
八 後々の清交を怨むの記
九 書信 ホワイト孃へ
十 新詩 A ヴァイオリンの女 B 花散村 C 黑い花と灰色の生 D 心のペンの夢 (E) Devil の笑のめぐり Explosive
十一 東京馬米九里 十二 鞍坐小言 十三 下馬交言
十四 三階の一人編輯室の窓より 十五 シィザア劇印象 去月藝學、圖書紹介、表裏挿畫
1 綠青政治
2 政治は藝術の一種
3 國家藝術政策
4 無言政治
5 ルソーの試演とナポレオンの軍學
6 ペンからパンへ
7 圖書哲學
8 圖書の善果の罪惡
9 宗教の藝術崇拜化
10 藝術透視の法律

以上皆完結せる小說、詩、評論、隨筆なり

□一人雜誌馬上大學の創刊號（大正二年四月）に對する各新聞雜誌の批評

馬が死ぬれば新しく馬を買ひヘルメットを被り、長靴を穿き、書齋に飽くと郊外に遠乘する、馬上の悠然たる姿を見ては何處かのノンキな貴公子だらうと羨む者もあるだらうが、やはり此の人が「ネオ、スフィンクス」なんて雜誌を出さなければならぬ、之れは決して米本君に取つては道樂ではない、やはり生きるためである、生きるといつて、この雜誌が出たために、君が世間的に地位を得る譯ではなし、物質的には却て損をするばかりだ、しかし僕は新雜誌に對して非常なよろこびを禁じ得ぬ、是迄君に對して常に空想の悲しみといふやうなものを感じてゐたのが、今日初めて多少たりとも體現の心强さに接した君を馬上の空想から引下ろすことは元より忍びぬ、さらばといつて沈默の孤獨生活を續けさす譯にも行かない、「ネオ、スフィンクス」の新生は此點に於て嬉しいのである、君は法科大學に籍を置いてゐるが、いつも馬を校庭につないで圖書館に入り、やたらに政治宗教哲學藝術等の本を漁つたものと思はれる此間にあつて、「政治は藝術なり」といふ思考を得、また時代の新潮流は君を新愛國主義者（綠青政治）（參照）に鍛き上げた、さうして馬上より觀る宇宙と人生とは、君をして無名の詩人たらしめ、哲學者たらしめた、府下粕谷村の土にコビりついて居る德富健次郎氏は農民の中に人間の眞性を見ようとしてゐるが君は猥雜なる都會をも厭はぬ、四本足の動物は君を何處へでも運ぶ、君は足の力を馬だけに試してゐてはいけぬ、餘程馬に感謝しなくてはならん、君の議論も雜筆も文章も度外にして獨白をやつてゐる處が

面白い、乘氣になつて馬から下りてはいかぬ、やはり一人で考へ一人で　語したまへ。（中略）表紙畫のスフィンクスは君の自畫で色のみどりは法科の試驗用紙の色、（下略）（上略）評論もあり感想もあり、詩もあり、小說もある。何れも無星神悅三郎の分身で、例の長髮を靡かせ。大路小路に風の如く馬を驅つてゐる姿とは切ても切れぬ趣きがあつてその天才的狂異的な獨斷に他に見られぬ特色もあり短所もある。（讀賣新聞）

馬上の大學生として有名なる米本悅三郎氏が一人にて編輯し一人にて發行する雜誌なり著者は常に小兒の心を失はざらん事を希ひ、人間は又植物なりといふパンセイズムを奉じて、動植物の如く和洋兩名を有し洋名をネオ、スフィンクスといふ、「綠青政治」「政治は藝術の一種なり」等の感想的論文を初めとし、小說あり、詩あり、馬上の感想あり、何れも特殊の味を有し、雜誌として

も亦ユニークの物たるを失はず。（萬朝報）

馬上大學は法科の大學生で長髮を垂れ常に馬に跨つて市中を濶步する奇男子米本悅三郎氏は此頃馬上大學と云ふ一人雜誌を發行した。俗名米本悅三郎、和名無星神洋名ネオ、スフィンクスなど云ふのも面白い。雜誌の內容は氏が馬上から得た學藝である、一號には「「馬上大學と私」「ネオ、スフィンクス」「綠青政治」などがある、充實して居るとは云へないが努力をつゞけたならば類の無い面白い雜誌となるに相違ない。「東京朝日新聞」

米本悅三郎君が單獨にて經營し執筆せる一人雜誌也「馬上大學と私」ネオ、スフィンクス「綠青政治」「政治は藝術の一種なり」「ペンからパンへ」の外「淸交を怨むの記」「リヽーホワイト孃よ」「水色の戀」等數種の小說を收む、棄て難きもの模倣し難きものあれど生硬と云ふ點は免れず、然し全誌を貫く淸新の氣は以て此の生硬を償ひ得て餘りありと云ふべし健全なる發達を望む。（二六新報）

馬上大學と云ふ雜誌が出來た小說も詩も評論も雜錄も何もかも一人でやると云ふ卽ち一人雜誌だ曾てあつた山路愛山氏の獨立評論（今もあるさうだが見た事はない）の行き方をズツと新らしくしたものでネオ、スフィンクスと云ふ名がある、蓋し此の雜誌の內容を說明するには此の言葉が適當してると思ふ、他人の爲に書いたものでない丈に熱もあれば力もある、とにかく歡迎するとしやう。（やまと新聞）

帝國法科大學生にて肩に垂るゝ長髮を馬上にて通學すもを以て知らるる米本悅三郎氏が平生の懷抱を何くれと無く發表すべく自費にて新たに創刊せる一人雜誌なり「馬上大學と私」以下十三章何れも此獨特の色彩ある文章と感想に滿つ。（時事新報）

一人雜誌と銘打つて現はれたるもの米本悅三郎氏が馬上にて學びたる一切の哲學感想等を揭載して世に問へるもの其ネオ、スフィンクスの一篇の如き編者の立脚を說明して餘りあるもの兎も角も風變りの雜誌と云ふべし。（中央新聞）

米本悅三郎氏が獨力經營執筆に成る月刊雜誌にして小說に詩に政治論に敎育論に八面に健筆を揮ふ馬上大學とは著者日常鞍上にあつて得たる想を發表する機關なればなりといふ。（國民新聞）

來往常に馬に騎り鞍上に思索を事とする米本悅三郎氏が一人にて評論も歌も詩も小說もかき且つ自ら畫ける奇拔なる雜誌なり。（都新聞）

馬上大學は米本悅三郎君の一人雜誌である未だ印刷の外一人で編輯し一人で出版された雜誌あるを聞かない。米本君が奇人と稱せられて居る。何時も馬上に悠々として、

其奈翁の如き風采に道往く人を驚かして居る人物である。馬上大學は此馬上に於て得たる、哲學と詩とを毎月發表せんとして興つた所の月刊雜誌である。內容は兎に角面白き企である事は云ふ迄もない ネオ、スフィンクスは米本君の假りの名、果してネオ、スフィンクスとなつて、廣漠たる世界に一大巨蹟を殘し得るか。（武俠世界）

馬上大學といふ毎月一回發行の名からして變つた雜誌が出た、表紙にスフィンクスの意匠を用ひ、ネオ、スフィンクスの銘を打つた所から見て、一瞥內容の程も察せられる。それが特に一人雜誌といふので形も四六よりも小さい位なポケット式だから更に珍らしい政治教育などのこともあるが、概して文藝ものが多い。（東亞之光）

馬上大學、和名を無星神洋名をネオ、スフィンクスと云ふ戸籍上の通稱米本悅三郎君が一人で文句を云ひ一人で小說を作り一人で詩を作り一人で畫を描き一人で編輯する菊版半截形の月刊雜誌で各の記事の終に必ず「年月日考出」と記してある、そこに米本君が自らネオ、スフィンクスと云ふ、時間上のものに空間の思想を與へた生命が籠つてゐるやうである、馬上天下を取つた古英雄の壯擧は夢想されないまでも氣の小さい大學の雜草を蹂躙するのは男兒快心のことであるに相違ない今少しく實際に今少しく强く今少しく平易に今少しく簡明にしたらどうかと思ふ。それと同時に讀者に小刀を用ひて讀むの手數をさせないやうにして貰ひたい。兎に角時々に從つて變幻出沒するさまく〳〵な米本君の思想は即ち自分を尊重する爲めに思想の混亂を統一して行かねばならぬ現代文藝批評家の肺腑を衝いて苦悶の聲を擧げしむるに足りるであらう。（圖書評論）

洋名ネオ、スフィンクス氏和名無星神、米本悅三郎氏の一人雜誌なり古の希臘のシープス市に生きて居た舊スフィンクスといふ怪物が夢といふ自由無制の國に住んでゐる米本氏の處へフラリと現れたるを以て氏はスフィンクスと問答の結果遂にスフィンクスより新スフィンクスの名を貰へりといふ。誌上には小說あり議論あり、雜筆あり、書翰あり、詩歌あり、總て米本氏一人の手になりて大童になつて人生の謎にぶつつかりたるものと見るべし。近頃面白き雜誌なり。氏の意氣や愛すべし眞面目なる努力と健全なる發達とを祈る。（現代）

この雜誌は近來にない珍らしいものである。和名無星神洋名 Neo Sphinx といふ米本悅三郎氏の一人雜誌で、獨自の哲學及藝術觀、詩、小說、批評等素朴な形式で發表されてある。內容の如何は兎に角興味のある試みであると云はねばならぬ。世の文壇といふものから離れて所謂純正孤獨な處が少らさ氣持がいい。（禾樂）

長髮乘馬で有名な帝大法科の米本悅三郎氏が何から何まで獨りで考案し又書かうと云ふ菊半截小形の一人雜誌である。馬上大學と云ふのは氏の學藝が多く馬上で得たものである事、又種々雜多な科目を載せる事から名づけたのだそうである、論文もあり感想もあり又小說もあると云ふ列べ方、私はこれ等多方面に氏がどれだけ成功するかは今後本誌の發展に見たいと思つて居る。兎に角氏自身を慰藉する爲めに作るので賣る爲めにするのでないと云ふ事はどこまでも本誌の强味である。（哲學雜誌）

一人にて小說だの評論だの隨筆だのと興に乘じていろ〳〵のことを書きたるものなり、一寸見た處單行本の形なれども、實は月刊雜誌の由にて、何處までも一人で書くのみならず印刷と賣却とを除く外は何もかも一人で遣るといふことがその特色なり。

其奈翁の如き風采に道往く人を驚かして居る人物である。馬上大學は此馬上に於て得たる、哲學と詩とを毎月發表せんとして興つた所の月刊雜誌である。內容は兎に角面白き企である事は云ふ迄もない ネオ、スフィンクスは米本君の假りの名、果してネオ、スフィンクスとなつて、廣漠たる世界に一大巨蹟を殘し得るか。（武俠世界）

馬上大學といふ毎月一回發行の名からして變つた雜誌が出た、表紙にスフィンクスの意匠を用ひ、ネオ、スフィンクスの銘を打つた所から見て、一瞥內容の程も察せられる。それが特に一人雜誌といふので形も四六よりも小さい位なポケット式だから更に珍らしい政治教育などのこともあるが、概して文藝ものが多い。（東亞之光）

馬上大學、和名を無星神洋名をネオ、スフィンクスと云ふ戸籍上の通稱米本悅三郎君が一人で文句を云ひ一人で小說を作り一人で詩を作り一人で畫を描き一人で編輯する菊版半截形の月刊雜誌で各の記事の終に必ず「年月日考出」と記してある、そこに米本君が自らネオ、スフィンクスと云ふ、時間上のものに空間の思想を與へた生命が籠つてゐるやうである、馬上天下を取つた古英雄の壯擧は夢想されないまでも氣の小さい大學の雜草を蹂躙するのは男兒快心のことであるに相違ない今少しく實際に今少しく强く今少しく平易に今少しく簡明にしたちどうかと思ふ。それと同時に讀者に小刀を用ひて讀むの手數をさせないやうにして貰ひたい。兎に角時々に從つて變幻出沒するさまざまな米本君の思想は即ち自分を尊重する爲めに思想の混亂を統一して行かねばならぬ現代文藝批評家の肺腑を衝いて苦悶の聲を擧げしむるに足りるであらう。（圖書評論）

洋名ネオ、スフィンクス氏和名無星神、米本

悅三郎氏の一人雜誌なり古の希臘のシープス市に生きて居た舊スフィンクスといふ怪物が夢といふ自由無制の國に住んでゐる米本氏の處へフラリと現れたるを以て氏はスフィンクスと問答の結果遂にスフィンクスより新ねをスフィンクスの名を貰へりといふ。

誌上には小說あり議論あり、雜筆あり、書翰あり、詩歌あり、總て米本氏一人の手になりて大童おほわらわになつて人生の謎にぶつかりたるものと見るべし。近頃面白き雜誌なり。氏の意氣や愛すべし眞面目なる努力と健全なる發達とを祈る。（現代）

この雜誌は近來にない珍らしいものである。和名無星神洋名 Néo Sphinx といふ米本悅三郎氏の一人雜誌で、獨自の哲學及藝術觀、詩、小說、批評等素朴な形式で發表されてある。內容の如何は兎に角興味のある試みであると云はねばならぬ。世の文壇といふものから離れて所謂純正孤獨な處が少らず氣持がいい。（禾纒）

長髮乘馬で有名な帝大法科の米本悅三郎氏が何から何まで獨りで考案し又書かうと云ふ菊半截小形の一人雜誌である。馬上大學と云ふのは氏の學藝が多く馬上で得たものである事、又種々雜多な科目を載せる事から名づけたのだそうである、論文もあり感想もあり又小說もあると云ふ列べ方、私はこれ等多方面に氏がどれだけ成功するかは今後本誌の發展に見たいと思つて居る。兎に角氏自身を慰藉する爲めに作るので賣る爲めにするのでないと云ふ事はどこまでも本誌の强味である。（哲學雜誌）

一人にて小說だの評論だの隨筆だのと興に乘じていろ〳〵のことを書きたるものなり、一寸見た處單行本の形なれども、實は月刊雜誌の由にて、何處までも一人で書くのみならず印刷と賣却とを除く外は何もかも一人で遣るといふことがその特色なり。

（太　陽）

馬上大學と云ふ一人雜誌が發行せられた、法科大學生馬上の人米本悅三郎氏の筆にかゝるもの同君は十年の間人と語らず教室にも碌に出入せず入つては讀み、出でゝは馬上に大自然を仰いで深く修養せられたるものを今度公にすることゝなつた論文あり、小說あり、詩あり、歌あり趣味を中心としたものである其の體裁と云ひ月並のもと違つて居る。（雄辯）

米本悅三郎氏の一人雜誌である、表紙畫から內容論文小說詩等すべて同氏一人の手になつたものである。菊半截の小形で氣持のよい雜誌である益々氏の努力と發展とを祈つてその前途を視する。（心の花）

馬上冥想市中を漫步する法科大學生米本氏の一人で書いて一人で發行する奇拔な雜誌である。面白いことが書いてある。ゆつくり拜見して批評しませう。（新日本）

馬上大學は又 Neo Sphinx といふ米本悅三郎君が常に騎馬にて帝國大學へ通ふの餘暇を以て書く文學雜誌である。けれど之を馬の雜誌と思ひ違ふものが多いといふ話である。此雜誌の卷末の「下馬交言」といふ讀者からの寄書を載せたものを見ると其讀者は兵隊が多い樣である。多分騎兵か若しくは馬上の將校であらう。雜誌は米本君一人にて書き表紙に一人雜誌と記してある。此人は恰度植物のやうに和名だの洋名だの昔の人の雅號に相當するものをも有つ。私は曾て長髮を垂れ馬上にて大學へ通ふ法學士のあることを四五年前から聞いてゐた。米本君は最早大學生として八九年になる相である。彼は唯「學生」であるといふ生活の嬉しさに當り前に卒業して終ふのを惜んでゐた。それ故試驗を受けずに故意に落第するといふ噂である。そして獨身者の學生として一日も長くローマンチックな淸い生活を貪らうとしてゐるのである。亡父が遺託した金が銀行から引出し得る限り引きだして、金が出なくなるまで其理想的なライフを送らうとしてゐるのだ相な。（文章世界文壇時流誌所載）

他は大同小異につき略す。

278
119

終

NÉO SPHINX'S SERIES 無神星叢書

1	（感想）	東京馬米九里	15 Sen
2	（論文）	藝術政治と軍學	20 ,,
3	（日記）	清 交 怨	15 ,,
4	（小說）	花 月 川 付 水色の戀	15 ,,
5	（書信）	ホワイト孃よ	15 ,,
6	（論文）	パンの政治	15 ,,
7	（新詩）	路ばたの草	10 ,,
8	（小說）	モヤの女	12 ,,
9	（隨筆）	鞍上と机上	15 ,,
10	以下每月二三册づゝ續刊		——